

# 「なにわ農業賞」8年度募集

## 優れた経営体を表彰

農業会議はこのほど、「第27回なにわ農業賞」(後援・大阪府、大阪府農業協同組合中央会)の募集を開始した。

この賞は、先進的な農業経営

によって地域農業をリードするとともに、都市環境の維持・改善への貢献を通じて、大阪農業の存在価値の向上に寄与している農業経営体を顕彰することが目的。平成12年の創設以来、これまで府内の173経営体を受

賞してきた。

表彰部門は、個別経営の部、法人経営の部に加えて7年度から「新規就農者の部」が新設されている。

6月15日(月)までに、農委会長等は関係機関・団体の協力を得て、農業会議に候補者を推薦する。農業会議では、審査委員会を経て顕彰委員会で決定する。表彰式は、10月29日開催予定の大阪府農業委員会大会席上

で執り行う。

昨年度は、個人経営部門で、神藤秀和氏(泉佐野市・野菜苗、芝生、ブドウ、水稲等)、藤田善敬氏(泉南市・八尾市・クリスマスローズ、紫陽花、西洋大文字草等)、横尾誠久氏(柏原市・ブドウ)、芝尾健氏(堺市・トマト、ネギ、シュンギク、コマツナ、水稲等)の4経営体、昨年度より新設した新規就農者部門で西野朱樹氏(岸和田市・水ナス、シュンギク、トウモロコシ、カブ等)、渡邊博文氏(八尾市・サツマイモ)、岸田崇氏(枚方市・イチゴ)の3経営体がそれぞれ受賞した。(沼田)

### なにわ農業賞受賞者紹介93

#### 都市近郊で水なすを生産

泉佐野市・松浪 正幸さん

令和元年度になにわ農業賞を受賞した泉佐野市下瓦屋の松浪正幸さん(59)は、主要作目であるハウス水なす10アールのほか、

ブロッコリーやリーフレタス、コマツナ、ミズナなどの多品目の野菜を計90アールで生産している。先祖代々専業農家の家に生まれ、会社勤めを経た後の平成13年、31歳で就農した。

経営面積の約半分は生産緑地。都市近郊の立地を活かし、販路はJA出荷を中心としながら、

JA直営の農産物直売所「こーたりな」や地元の「ホテル日航関西空港」などにも出荷している。

昨年までは、地域の農業者とともに「北中マルシェ」を定期開催しており、訪れた地域住民とコミュニケーションをとりながら農産物を直売。都市部ゆえに地域住民との共生が重要という考えのもと実践してきた取り組みだ。

#### 時代に適応して農業を続ける

近年、資材価格の高騰に加え、近隣で宅地化が進んだことで水はけの悪化といった課題も生じ、営農環境にもこれまで以上の配慮が求められる。また、平成30年の台風第21号では、近隣の多くの農家のハウスが倒壊する中、自身のハウスの周辺が住宅であったため、無事であったことに安堵すると同時に、農業が常に災害と隣り合わせであることを痛感した。

そうした中で、少しでも無事に長く農業を続けていくことが重要であり、多くの消費者に野菜

## 241件を認定 大阪府農業経営計画認定審査

大阪府農業経営計画認定審査会(会長・摂南大学農学部浦出俊和教授)は3月25日にJAバンク大阪信連事務センターで、府知事から諮問のあった241件の経営計画について審査した。

当であると府知事に答申した。内訳は新規が55件、継続が186件。認定タイプでは「大阪府認定地域貢献型」が210件、「大阪エコ農産物の認証」が24件、「地域営農組織」が5件、「大阪府認定経営強化型農業者」が2件であった。

また、年齢別では70歳代が101件、60歳代が76件、50歳代が20件、80歳以上と40歳代が15件、39歳以下が9件、組織が5件となり、地区別では泉州81件、中部67件、北部53件、南河内40件となった。

を届け続けることが農家の役割だと考えるようになったという。また、過去にはロマネスコやサボイキャベツなどの希少野菜の生産にも取り組んできたが、近年は近隣農家とともにミニ白菜の生産にも取り組み始めている。「単身世帯が増える中で一般的なサイズの白菜は使い切りにくい家庭もあり、量が手頃なミニ白菜は時代のニーズに合うのでは」という狙いがあるそうだ。

将来は、自ら育てた野菜を使った料理をキッチンカーで提供したいという夢も持っている松浪さん。「後継者はい



松浪さんの水なすハウスで

ないので、できる限り営農を続けていきたい」と控えめに語る一方、時代に適応した農業への関心が窺える。(沼田)